



確かな学力の向上をめざして【6月】

■長期欠席、不登校の未然防止に向けた取組のポイント

長期欠席、不登校の未然防止に向けて、これまでも様々な取組が進められてきました。中部全体のデータを見ると改善の傾向が見られる点と大きな変化が見られない点があります。より効果的な対策を進めていくためにも、データをもとに傾向をつかみ、今までとは別の視点から取組を考えることも必要だと思います。

＝平成27年度の欠席の状況について＝

小学校では長期欠席出現率が県平均よりやや下回りました。中学校では、依然として長期欠席や不登校の出現率が高い傾向が続いています。

【平成27年度の欠席の状況】

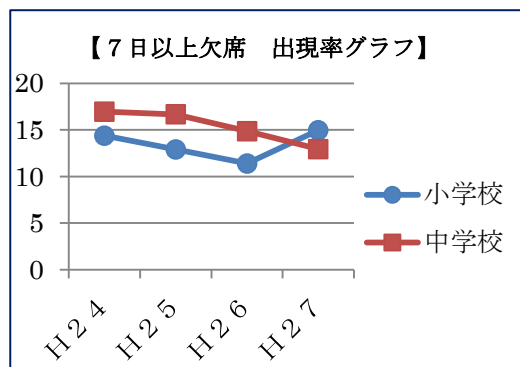
（表中の数字は出現率・矢印は県平均との比較）

	長期欠席	うち不登校	7日以上欠席
小学校	0.93↓	0.49↓	14.46↑
中学校	4.51↑	3.68↑	12.93↗

7日以上欠席の出現率に注目！

小学校では、県平均との比較、昨年度との比較いずれも、大幅に7日以上欠席の出現率が高くなっています。今後、長期欠席につながる可能性がある児童がいると予想されます。

中学校では、県平均より少し高めではありますが、ここ数年間では出現率の低下が見られます。しかし、30日以上欠席する生徒の出現率が高いことをみると、欠席が7日以上になると、長期の欠席につながる傾向があると思われる。



ポイント1

児童生徒が学校を休まない環境づくり

授業づくり、学級づくり、健康教育、食育、心理教育など、日々の様々な取組が児童生徒の欠席を減らすことにつながります。子どもたちが「行きたい学校・学級」をつくることは教師の使命です。また、「休みたいけど学校に行こうかな」という気持ちになるような環境づくりも必要です。

ポイント2

教職員が児童生徒・保護者とつながる

児童生徒との、日頃のちょっとした時間の会話が大切です。そうすることにより、少しの変化に気が付きやすく、早めの対応にもつながります。また、保護者との関係づくりも重要です。何かある時だけでなく、参観日や部活動で応援にこられた時などの会話も大事にし、保護者が相談しやすい関係をつくっておくことが求められます。

児童生徒や保護者の思いを理解するための「聴き方」、
「話し方」を学ぶことも大切です。

